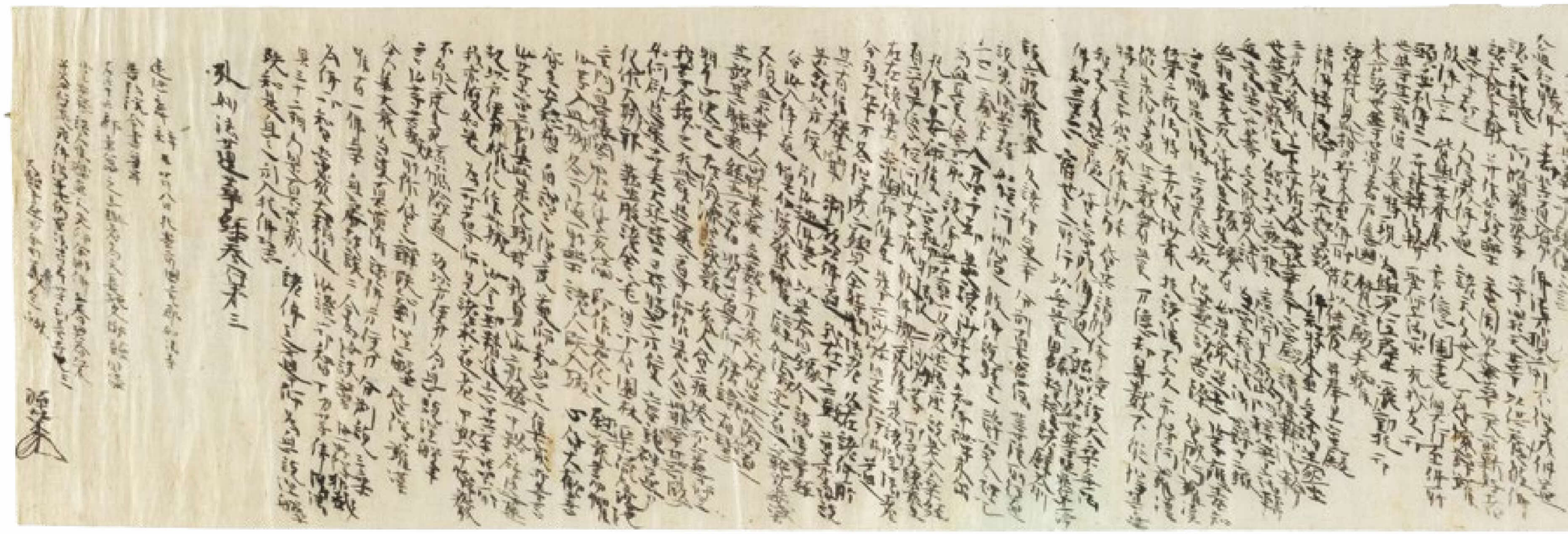
読まれないお経

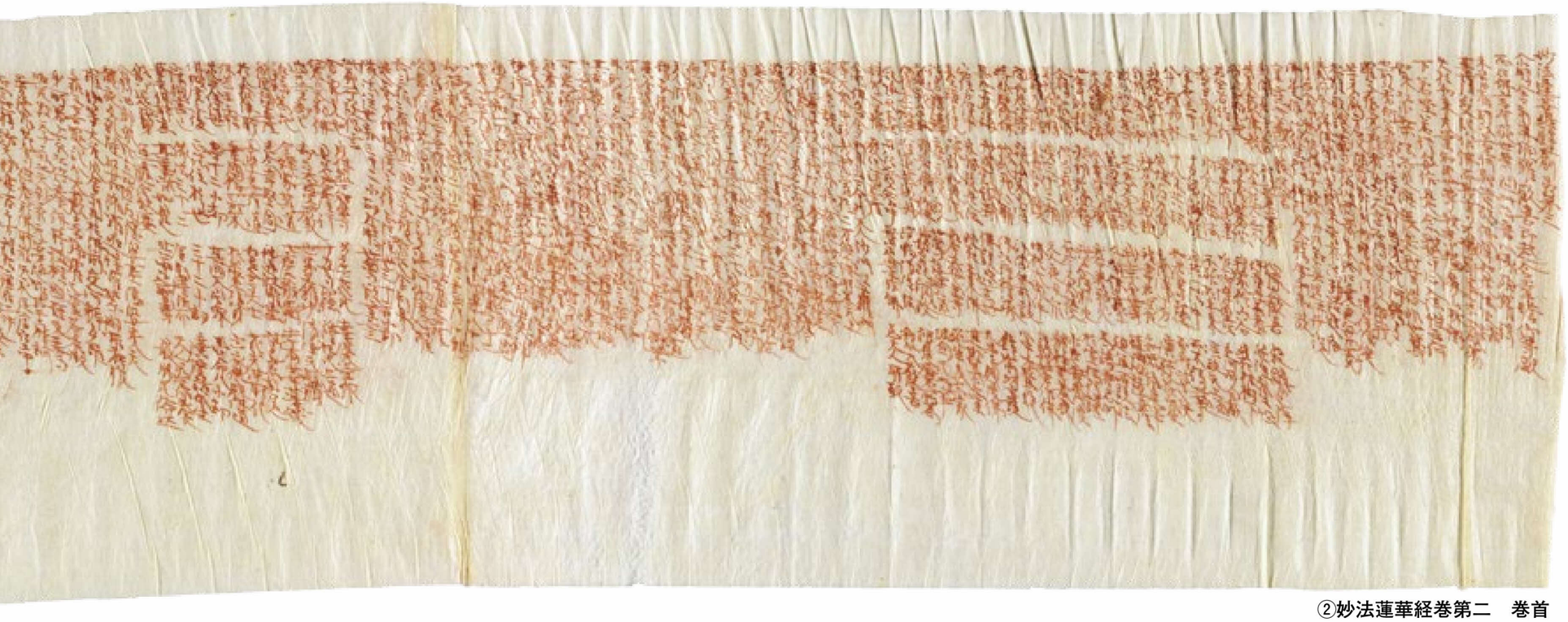
写真を見てください。これが実物大なのです。文字が書いてありますが、読めないくらい小さな字です。書いてある内容は、妙法蓮華経、いわゆる法華経です。

これらのお経は、国宝・投入堂で有名な、鳥取県の三徳山三佛寺のものです。投入堂の近くに納経堂（重要文化財）という小さなお堂があり、そこに伝わったものを、奈良文化財研究所で調査しています。

上のお経は、奥書によると、南北朝時代、南朝の建徳2年（1371）、豊前国（福岡県）の如法寺で書かれています。六十六部とありますから、日本全国66ヶ国をすべて巡礼して、各国に1部ずつ、法華経を納めて回ったのでしょう。



①妙法蓮華経巻第三　巻末



②妙法蓮華経巻第二　巻首

下のお経は朱で書いてありますが、朱は血を表現しています。自分の血を朱に混ぜて書くこともありました。このお経には、縦に細かいシワが無数に入っており、巻くときに力を込めて細く巻いたことがわかります。また、普通、巻物は左奥から右端に向かって巻いていくはずですが、このお経は逆に、書いた順に、右端から左奥に向かって巻いています。

普通、お経は、端正な楷書体で書きます。いっぽうこれらは、あとで読むことは考えず、書いて納めることに意味があったのでしょう。こういうお経は、普通は後世に残らないのですが、納経堂という、平安時代の小さなお堂とともに残った貴重な事例です。

10月21日の鳥取県中部地震では、投入堂をはじめ、建物自体は壊れませんでした。山中でも丈夫に造った、昔の建築のすごさがわかります。ただし、文殊堂（重要文化財）の柱が立っている岩盤が割れてしまい、柱が浮いた被害が出たそうです。迅速な復興を願っています。　（文化遺産部　吉川 聡）